

山間地域在住の高齢者との交流における 看護学生の世代性及び対人援助力への影響

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

讃 井 真 理, 今 坂 鈴 江, 風 間 栄 子, 岡 田 京 子
前 信 由 美, 新 川 雅 子, 空 本 恵 美, 加 藤 重 子
石 川 孝 則, 田 村 和 恵, 岩 本 由 美, 平 岡 正 史
平 光 修, 森 田 克 也, 土 肥 敏 博, 佐々木 秀 美

要約

近年、高齢者世代が若者世代と交流することによるポジティブな影響が報告されている。一方で高齢者と関わるることによる若者世代の影響についても注目されている。

本研究は若者世代が高齢者と交流することによって、どのように世代性及び対人援助力を修得するのかを明らかにすることを目的とした。対象は山間地域在住の高齢者と交流した2年次看護学生で、研究同意が得られた117名であった。世代性関心尺度、及び独自の対人援助力調査を、交流前後で実施した。世代性関心尺度は、探索的因子分析後に交流前後の各因子得点を比較した。また世代性関心尺度と対人援助力との関連は相関係数を算出し、学生の充実度でも比較検討した。

看護学生の世代性関心は【後継性】【世話性】【発意性】【創志性】の4因子で構成された。学生の世代性関心は交流前に比べて、交流後は有意に後継性と創志性が高かった。また世代性関心と対人援助力は弱い相関関係にあった。さらに交流が学生自身、或いは高齢者にとってたいへん有意義であると回答した学生は世話性の得点が高かった。看護学生は高齢者と交流することで、世代を継ぐ者としての関心と、自分たちにはない高齢者の一面を内面で受けとめて成長していることが伺えた。地域の歴史に触れ、生活者としての高齢者と対話する交流は看護学生の後継者としての世代性を成長・発達させ、対人援助力を内面から高めることができることが示唆された。

キーワード：異世代間交流 看護学生 世代性 対人援助力

■ はじめに

世代間交流とは、異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えることとされ¹⁾²⁾、高齢者の身体的・心理的な健康へのポジティブな効果が報告されている^{3)~9)}。たとえば、亀井らは多世代交流によって高齢者のうつ傾向が改善されQOL（生活の質）が向上したことを報告している³⁾。また大場らは高齢者世代の子どもやその保護者、学校に対する長期間のボランティア活動によって、高齢者の社会的ネットワークの増加、握力等の体力と健康自己評価の改善、低下抑制が認められたことを報告している⁴⁾。さらに、高齢者のポジティブな感情を生起させることや、そのことが各種の疾患の予防につながる可能性なども報告されている⁵⁾。このように異世代と交流することは高齢者にとって心理社会的側面を成長・発達させ、高齢者の身体的側面をも維持する効果が期待できる。

一方、異世代と交流することによる若者世代（児童期～成人期前期）への影響は、高齢者イメージの

低下を抑制することが報告されている⁴⁾。また福祉や理学療法を学ぶ大学生が世代間交流へ参加することにより自己形成過程とその条件、あるいは大人への移行をどのように学んだのかの検討では、かわりを持った他者の将来を、支援者としてではなく、一人の人間として気遣うようになることで、若者自身が今自分にできることを意識化できる⁶⁾などの報告がある。しかし、若者世代は核家族化という生活背景により、異世代と接点を持つことが少ない者も多く、高齢者世代にはないコミュニケーション方法で日常生活をおくっている。その若者世代のコミュニケーションについては、時間や場所を共有し直接顔を合わす伝え合い方を避けることも可能である、SNSというコミュニケーション方法に慣れることで生じる弊害（対面を避ける、語彙力の低下、世代間で使用する言葉の格差の拡大、注意や助言の機会の逸失、承認願望の強さ）が指摘されている^{10)~12)}。一方では学校の中のヨコ関係の社会から逸脱しないようにいつも周りに気を使い目立たないために空気を読み取り、相手に合わせるという人間関係の中で生活している¹⁰⁾¹²⁾ ことなども報告されている。

看護は、あらゆる世代を対象として介入を行っていく必要がある。そのため、それに対応するコミュニケーションスキルを必要とする職業である。看護学生においては、初年度から様々な科目と場所でコミュニケーションの大切さと重要性を学ぶ。しかしながら、多くの時間を同世代と過ごす看護学生にとっては、異世代との交流の場面や時間はそう多くない。このようにコミュニケーションスキルが重要である看護学生であるにもかかわらず、異世代とのコミュニケーションスキルを修得する機会は少ない。

そうした若者世代である看護学生が実習において抱える困惑感、コミュニケーション力の不足感、話題提供力の未熟感といった課題^{13)~19)}は、日ごろの同世代間コミュニケーションとは違う異世代へのコミュニケーションスキルを学生に要求する。先行研究では看護学生は4年間を通して少しずつ段階的に同世代間以外とのコミュニケーション¹³⁾のマナーとも言える基本的スキルに気付き、学び、それと同時に援助的コミュニケーションスキル^{13)~18)}を修得していくという報告がある。それらの先行研究で述べられている課題は、看護学生のコミュニケーションスキルを測定できる尺度を開発し、看護学生が如何にスキルを身につけていくかを検証していくこと、また学生の特性を理解したコミュニケーションスキルの修得方法を検討すること、さらに学生の対人に対する適度なストレスの下で如何にスキルを上達させるかであった。そこで、本研究では、看護学生を対象として、学生にとっては最も未知の世代であろう高齢者と交流することによって、学生は何をどのように影響を受け、対人援助の基礎を培い、成長・発達していくのかを明確することが重要であると考えた。その際、高齢者の世代性から影響された学生自身の世代性の発達・成長を明らかにすることが、学生の特徴を生かしたコミュニケーションスキルの修得方法の検討につながるのではないかと考える。

前述したように、看護は人を理解する力が求められ、コミュニケーション能力・スキルは看護には欠かせない能力¹³⁾の一つとして基礎教育の中で位置づけられている。現在の若者世代は生活環境の変化から世代ならではのコミュニケーションスタイルを獲得している。しかし、看護学生はこれまでとは違い、社会の組織員として他者とかわり、コミュニケーションを含め様々な「対人援助」に関する課題を達成していく必要性に迫られている。他方、看護基礎教育においては「対人援助」に関する学生に内在する対人関係能力を引き出していくことが求められている。本学では、文部科学省の研究ブランディング事業に採択され、高齢者の健康長寿に向けた活動を行っている。その事業では学生の育成も重要な位置づけとして展開しているところである。以上のことを踏まえ、その事業に先駆けて行った看護学生と山間地域の高齢者との交流において、看護学生が世代性とコミュニケーションを中心とする対人援助力をどのように発達させるのかを検証し、今後の基礎看護教育における世代間交流の意義と学生の対人援助力育成についても検討する。

■ I. 研究目的

本研究の目的は、2年次看護学生が山間地域の高齢者との交流において、どのように世代性関心とコミュニケーションを中心とする対人援助力を発達・成長させているかを明らかにすることである。

■ II. 研究方法

1. 高齢者との交流授業

XX年6月にA市B地域の福祉センターを含めた7地区へ、老年看護学概論履修学生133名が2回に分かれて訪問した。B地域は対象学生が通う大学がある市（沿岸地域）の約5分の1の面積で、広島県を中心部に位置する。B地域には6か所の地域センターがあり、看護学生はその6か所それぞれに分かれて訪問した。この取り組みは社会福祉協議会の全面的な協力のもとで実施した。

訪問先での交流内容は、各地区在住の方々が計画され、地区の歴史やこれまでの地域の活動、研究成果の報告、ご自宅訪問、ゲートボールやゲームなどのアクティビティ、しば餅づくり、健康チェック（学生が血圧を測定することに協力していただく）、座談会、地区サロン訪問、民俗資料館見学・説明等さまざまであった（表1、図1、図2）。交流は1地区1回につき2時間～2時間半で実施され、各地区には70歳～80歳代を中心とした10～20名の60歳以上高齢者が、学生10～15名を招いてくださった。学生はさらに小グループに分かれて様々に交流したが、交流時において対話のきっかけとなり、高齢者及びその生活を理解するために「お伺いすること」の課題をもって訪問した。学生の課題は生活・歴史・思い出・健康・若者世代に伝えたいことは何か等であった。学生は、地区での交流の学びについて資料を基に発表しあい、最終レポートを提出した。

表1 各地区の交流会の内容

地区	交流内容（全てでバイタルサインの測定）	代表及び地域 参加者数／1回	交流時間 ／1回	担当教員 数／1回
A	グランドゴルフ／座談会	男性 4名 女性 5名		1
B	自宅訪問（計5件）（1件1～4名のご家族）	男性 1名 女性 1名		1
C	座談会／Aサロン訪問	男性 5名 女性 7名		1
D	B・Cサロン訪問	代表者女性2名と サロン参加者10名から15名	2時間～ 2時間半	1
E	自宅訪問／民俗資料館見学／創作ゲーム	男性 3名 女性 8名		1
F	しばもちづくり／座談会／グランドゴルフ	男性 1名 女性 8名		1
社会福祉 協 議 会	地区巡回	男性 2名 女性 1名		1

*座談会は地区の歴史や特徴の説明、暮らしぶりなどを学生から質問



図1 はじめての学生同士以外の血圧測定



図2 地元の研究成果を伝承

本取り組みにおいて山間地域の高齢者に限定した理由は、学生が1年次に沿岸地域のフィールドワークを行っていること、その際、一人ひとりの学生が高齢者とゆっくり関わる時間は少ないこと、陸続きであっても交通事情等が比較的利便な大学周辺の暮らしとの違いから「人の暮らし」を体感してほしいこと、生活者としての高齢者とかかわり、触れ合うことで異世代とのコミュニケーションに少しでも親しむこと等を目的としたためである。そのため、今回のフィールドワークでは、学生の普段生活している環境とは異なる山間地域のご自宅訪問なども依頼し、可能な限り地域の歴史や現在の暮らしについて触れ合える交流をお願いした。

2. 参加者

A 大学2年次看護学生で老年看護学概論を履修し、高齢者との交流授業に出席し、研究同意が得られた133名のうち、交流前後の両方の調査に回答し、調査項目に欠損がない117名である。

3. 調査期間

XX 年5月～7月

4. 調査方法

学生へは、週末に実施する交流授業の、週初めである5日前のオリエンテーション直前に、交流前の世代性関心尺度調査、及び対人援助力調査を実施した。学生は日程と方法について説明を受けた後に、それぞれ交流に向けて課題を提出した。課題内容を教員が確認後、学生は各日程に沿って高齢者との交流授業に参画した。交流直後、交流後の世代性関心尺度調査²⁰⁾、及び対人援助力調査を実施した。また、本研究で実施したフィールドワークに対する学生の充実度について「高齢者との交流による若者世代の有意義性」「若者世代との交流による高齢者にとっての有意義性」「地域の生活課題理解の達成度」「地域の健康課題理解の達成度」「コミュニケーションへの困難度」を4件法で、そして総合的評価として「今回のフィールドワークの授業満足度」について100点を満点として記入してもらった。さらに、調査後に各グループで学びをまとめて発表し、各自で見聞し、考察した内容をレポートとして提出した。交流前後の調査実施の間隔は5日間であり、その間は祭日等の休日をはさまず、老年看護学関連科目の講義はなかった。

5. 調査内容

- ①交流前：年齢・性別・家族構成と同居状況・高齢者との交流状況（①全く交流していない②めったに交流していない③少しは交流している④いつも交流している）・世代性関心尺度20項目（4件法①全く当てはまらない②当てはまらない③当てはまる④非常に当てはまる＝0～80点）
- ②交流後：性別・交流の充実度（自分にとって有意義だったか、高齢者にとって有意義だったか、健康課題の理解度、生活課題の理解度、コミュニケーションは難しかったかの5項目；①とてもそう思う②思う③思わない④全く思わない）、総合的にみた満足度（100点を満点として数値化0～100点）、世代性関心尺度、対人援助力調査16項目（5件法⑤とてもそう思う④そう思う③どちらともいえない②あまりそう思わない①全く思わない＝0～80点）

世代性関心尺度は、丸島らの改訂版世代性関心尺度を用いた²⁰⁾。丸島らの尺度を使用した目的は、大学生から高齢者まで使用することが可能であることと、高齢者との交流による学生の世話性等の発達状況を検証できると考えたためである。また、対人援助力調査は、既存の文献^{13)～17)}を参考にして独自に作成した。

6. 分析方法

世代性関心尺度は、項目分析（天井効果と床効果の検討、GP分析、IT相関）後に探索的因子分析を行い、各因子得点と総合得点を交流前後で対応のある t 検定で分析した。また世代性関心尺度と対人援助力との関連はpearsonの積率相関係数を算出した。対人援助力調査についても項目分析（天井効果と

床効果の検討, GP 分析, IT 相関), 探索的因子分析を行った。高齢者との交流後の学生の充実度と学生の世代性関心及び対人援助力の得点について対応のない t 検定で検討した。分析は IBM SPSS Statistics Version 24を使用した。

7. 倫理的配慮

学生には, 本研究を行う意義と方法を説明し, 成績提出後に調査内容をデータ化し, 成績には一切関係しないこと, 個人が特定されないこと, 参加は自由意志であり, 参加しない場合でも不利益がないことを口頭と書面で説明した。また, 研究修了後に責任をもって調査票をシュレッターにかけて破棄することを説明した。任意の個人 ID を割り振り, 調査票への ID 記入により, 研究の同意とした。本研究は広島文化学園大学研究ブランディング事業の一環で実施したものであり, 広島文化学園大学看護学研究科・看護学部倫理委員会の承認を得ている (承認番号: 1703)。開示すべき利益相反はない。

■ Ⅲ. 結果

1. 参加者の属性

参加学生は117名 (男性18名, 女性99名) であった。入学までの同居状況は3世代が23名 (20.2%), 2世代が94名 (79.8%) であった。高齢者世代との交流の機会, 全く交流がないが5名 (4.3%), 減多に交流していない34名 (29.1%), 少しは交流している55名 (47.0%), いつも交流しているのは23名 (19.7%) であった。

高齢者との交流について, 自分にとって有意義だと回答した者が89名 (75.2%) で, そう思わない者はいなかった。高齢者にとって有意義だと回答した者は84名 (71.1%) であり, 思わない者はいなかった。地域の健康課題と生活課題に対する理解度は, それぞれ115名 (98%), 116名 (99.1%) が理解できたと回答した。高齢者とのコミュニケーションを難しかったと回答した者は48名 (41.0%) で, 難しく思わなかった者は69名 (59.0%) であった。交流会の満足度は, 7割以上が90点以上の評価であった。

表2 参加者の属性

項 目		名	(%)
平均年齢	19.4±0.88 歳		
性別	男性	18	(15.4)
	女性	99	(84.6)
入学前同居状況	3世代以上で同居	23	(20.2)
	2世代で同居	94	(79.8)
	一人暮らし	0	(0.0)
高齢者世代との交流の機会	全く交流していない	5	(4.3)
	減多に交流していない	34	(29.1)
	少しは交流している	55	(47.0)
	いつも交流している	23	(19.7)
高齢者世代との交流についての充実度			
自分にとって有意義	とてもそう思う	89	(75.2)
	そう思う	28	(24.8)
	思わない	0	(0.0)
	全く思わない	0	(0.0)
高齢者にとって有意義	とてもそう思う	84	(71.1)
	そう思う	33	(28.9)
	思わない	0	(0.0)
	全く思わない	0	(0.0)
健康課題は理解できた	とてもそう思う	57	(48.7)
	そう思う	58	(49.6)
	思わない	2	(1.7)
	全く思わない	0	(0.0)
生活課題は理解できた	とてもそう思う	57	(48.7)
	そう思う	59	(50.4)
	思わない	1	(0.9)
	全く思わない	0	(0.0)
コミュニケーションは難しかった	とてもそう思う	13	(11.1)
	そう思う	35	(29.9)
	あまりそう思わない	61	(52.1)
	全くそう思わない	8	(6.9)
交流会の満足度 (100段階)	100点	36	(30.8)
	90-99点	49	(41.9)
	80-89点	24	(20.5)
	70-79点	7	(6.0)
	0-69点	0	(0.0)
	無回答	1	(0.9)

2. 世代性関心尺度の因子分析

世代性関心尺度20項目のうち、天井効果、床効果で削除項目はなかったが、IT 関連で2項目（12, 16）、さらに GP 分析で6項目（2, 9, 11, 14, 15, 18）を削除した。全12項目で探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。スクリープロットから4因子とし、因子負荷量は0.45以上の項目を抽出した。結果、1項目（4）については因子負荷量0.35以上が2因子にわたり示されたため削除項目とした。また、1項目（19）については、因子負荷量は0.30以上が2因子にわたっているが、第2因子への因子負荷量が高いこと、この1項目を加えたほうが信頼係数は高いことから削除せず項目として加えることとした。下位尺度である4因子は【後継性】【世話性】【発意性】【創志性】と命名した。

【後継性】は「私の死後にも私が貢献したことは残っているように思う」「自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた」という項目で構成されていた。これらの項目は丸島らの結果では継承性の因子であった。本研究ではこれに加えて「変わった考えができる」という、視点を変えるようなものの見方が示されていることから、継承していく側ではなく受け継ぐ側の意識と考えて命名した。【世話性】は「困っている人を見るとつい手助けしたくなる」「相手の話に耳を傾ける」などであり、丸島らの世話性因子に含まれる項目であった。【発意性】は「私は変わったことや珍しいことをするのが好き」「夢のようなことを考えるのが好き」であった。丸島らはこれらの項目を創造性として命名していた。本研究では看護を学び始めた学生であり、創り上げるという経験は未成熟であろう。そのため何にでもトライしてみよう、この先に何があるか視てみようとする発動的な意識として命名した。【創志性】は「問題を解いたり、物を作ったりしているときが楽しい」「自分のすることはたいへん新しく創造的である」の項目であった。この項目はこれから何かを創り出すために、志をもつという意識と解釈した。創意よりも行動に移し、志すための経験を積み始め、また模索している状況を示した言葉として採用した。

表3 高齢者との交流前の世代性関心尺度因子分析

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
後継性 Cronbach's α 係数=0.71				
17. 私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う	0.632	0.093	0.085	0.045
20. 自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた	0.533	0.241	-0.058	0.034
10. 物を考えるときに変わった考えができます	0.465	0.075	0.284	0.139
世話性 Cronbach's α 係数=0.69				
19. 困っている人を見ると、つい手助けしたくなる	0.352	0.612	0.159	-0.042
3. 悲しんでいる人を見たらなぐさめる	0.064	0.491	0.126	0.061
13. 相手の話に耳を傾ける	0.016	0.482	-0.014	-0.060
8. 私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時とてもうれしく感じる	0.046	0.456	0.300	0.212
発意性 Cronbach's α 係数=0.69				
1. 私は変わったことや珍しいことをするのが好きだ	0.044	0.073	0.693	0.049
6. 私は夢のようなことを考えるのが好きだ	0.182	0.232	0.637	-0.033
創志性 Cronbach's α 係数=0.71				
7. 私は問題をといたり、ものを作ったりしている時が一番楽しい	0.020	0.070	-0.089	0.726
5. 私は自分がすることは、たいへん新しく創造的であるように努めている	0.331	0.017	0.252	0.467
因子抽出法：主因子法（プロマックス回転）	因子間相関			
	第1因子	0.505	0.532	0.391
	第2因子		0.301	0.692
	第3因子			0.361

3. 世代性関心尺度得点の変化

世代性関心尺度の因子得点及び総得点を、高齢者との交流前後で比較した。全ての因子において、交流前よりも交流後のほうが高値を示した。交流前後で有意差を認めた因子は、【後継性】と【創志性】であった($t(91) = -2.48, p = .015, ES:d = 0.31, t(91) = -3.01, p = .003, ES:d = 0.47$)。また総合得点においても有意差を認めた ($t(91) = -3.77, p < .0001, ES:d = 0.36$)。発意性に有意傾向を認めたほかは、有意な差は見られなかった。

表4 世代性関心尺度の因子得点の交流前後の比較

		n=117			
		平均値	± 標準偏差	t 値	Cohen's d
後継性	前	6.9	± 1.6	-2.48*	0.31
	後	7.3	± 1.6		
世話性	前	12.6	± 1.6	-0.69	0.09
	後	12.7	± 1.8		
発意性	前	5.5	± 1.3	-1.19	0.16
	後	5.6	± 1.4		
創志性	前	4.6	± 1.2	-3.00**	0.47
	後	5.0	± 1.2		
世代性関心総合	前	29.6	± 3.9	-3.77***	0.36
	後	30.9	± 3.8		

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

表5 世代性関心尺度の因子得点の性差

		n=117			
【交流前】	性別	平均値	± 標準偏差	t 値	Cohen's d
後継性	男性	7.4	± 2.1	0.96	0.25
	女性	6.9	± 1.5		
世話性	男性	11.9	± 1.7	-1.26	0.60
	女性	12.5	± 1.6		
発意性	男性	5.0	± 1.3	-1.69†	0.56
	女性	5.6	± 1.2		
創志性	男性	4.8	± 1.2	0.76	0.14
	女性	4.5	± 1.2		
世代性関心総合	男性	29.1	± 4.1	-0.45	0.17
	女性	29.5	± 3.7		
【交流後】	性別	平均値	± 標準偏差	t 値	Cohen's d
後継性	男性	8.0	± 1.7	1.66	0.46
	女性	7.2	± 1.6		
世話性	男性	12.5	± 2.2	-0.35	0.11
	女性	12.7	± 1.8		
発意性	男性	5.9	± 1.1	0.58	0.14
	女性	5.6	± 1.4		
創志性	男性	5.2	± 0.9	0.48	0.10
	女性	5.0	± 1.2		
世代性関心総合	男性	31.5	± 4.0	0.69	0.20
	女性	30.7	± 3.8		

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 †p<.10

4. 世代性関心と対人援助力の関連

世代性関心と対人援助力の関連を pearson の積率相関係数で分析した。その結果、交流前後ともに相関関係を認めた ($r=.271(p=.008)$, $r=.352(p<.0001)$)。

5. 交流会の充実度が学生の世代性関心へ及ぼす影響

学生の世代性関心を、交流後の学生の充実度から検討した。学生の充実度は、高齢者との交流は若者世代にとって有意義と思うか、逆に若者世代との交流が高齢者にとって有意義と思うか、また、学生の課題達成状況を、生活課題及び健康課題の理解度から問うた。さらに、コミュニケーションは難しいも

のと感じたかであり、充実度の違いによる世代性関心の因子得点の差を検討した。

若者と高齢者との交流が若者世代にとって、また高齢者世代にとって有意義であると非常に感じた学生とそれ以外の学生とで比較すると、どちらも非常に有意義だと回答した者が、それ以外の者より【世話性】が高かった ($t(116) = -3.19, p = .002, ES:d = 0.67, t(116) = -2.58, p = .01, ES:d = 0.54$)。高齢者の健康課題を理解できたと思うかどうかによる世代性関心は有意な差を認めなかった。しかし生活課題を理解できたかの問いに対しては、とてもそう思うと答えた者はそれ以外の者より【世話性】【創志性】に有

表6 学生の交流会に対する充実度による世代性関心の因子得点

		n	平均値	± 標準誤差	t 値	Cohen's d
高齢者との交流は若者世代にとって有意義と思うか	後継性	89	7.4	± 0.2	0.95	0.20
		28	7.7	± 0.3		
	世話性	89	12.2	± 0.2	-3.19**	0.67
		28	10.7	± 0.4		
	発意性	89	5.8	± 0.1	0.16	0.34
		28	5.4	± 0.2		
	創志性	89	5.0	± 0.2	0.11	0.01
		28	5.0	± 0.2		
	世代性関心総合	89	31.2	± 0.4	1.58	0.34
		28	29.8	± 0.8		
若者世代との交流は高齢者にとって有意義と思うか	後継性	84	7.4	± 0.2	0.46	0.13
		33	7.6	± 0.2		
	世話性	84	12.2	± 0.2	-2.58*	0.54
		33	11.0	± 0.4		
	発意性	84	5.8	± 0.1	-1.50	0.21
		33	5.5	± 0.2		
	創志性	84	5.1	± 0.1	-0.50	0.09
		33	5.0	± 0.2		
	世代性関心総合	84	31.2	± 0.5	-1.25	0.51
		33	29.1	± 0.6		
生活課題は理解できたと思うか	後継性	57	7.6	± 0.2	-0.86	0.13
		60	7.4	± 0.2		
	世話性	57	12.3	± 0.3	-2.32*	0.39
		60	11.4	± 0.3		
	発意性	57	5.7	± 0.2	-0.52	0.08
		60	5.8	± 0.1		
	創志性	57	5.3	± 0.2	-2.16*	0.43
		60	4.8	± 0.1		
	世代性関心総合	57	31.5	± 0.6	-1.88†	0.31
		60	30.2	± 0.5		
健康課題は理解できたと思うか	後継性	57	7.6	± 0.2	-0.62	0.14
		60	7.4	± 0.2		
	世話性	57	12.1	± 0.3	-0.93	0.18
		60	11.7	± 0.3		
	発意性	57	5.7	± 0.1	-0.27	0.08
		60	5.8	± 0.2		
	創志性	57	5.1	± 0.2	-1.03	0.18
		60	4.9	± 0.1		
	世代性関心総合	57	31.2	± 0.5	-1.07	0.27
		60	30.4	± 0.6		
コミュニケーションは難しいと感じたか	後継性	11	6.8	± 0.5	0.94	0.31
		91	7.3	± 0.2		
	世話性	11	12.5	± 0.7	-0.73	0.22
		91	12.0	± 0.2		
	発意性	11	6.0	± 0.4	-0.88	0.28
		91	5.6	± 0.1		
	創志性	11	5.1	± 0.3	-0.49	0.16
		91	4.9	± 0.1		
	世代性関心総合	11	30.9	± 1.1	-0.28	0.09
		91	30.6	± 0.4		

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 † p<.10

意差を認め ($t(116) = -2.32, p = .02, ES:d = 0.39, t(116) = -2.58, p = .03, ES:d = 0.43$), 総合においても有意な傾向があった ($t(116) = -1.88, p = .06, ES:d = 0.31$)。コミュニケーションが難しかったか否かの違いでは世代性関心の得点に有意な差は認めなかった。

6. コミュニケーション力と対人援助力

コミュニケーションを中心とした対人援助力は項目分析 (天井効果と床効果の検討, GP 分析, IT 相関) では削除項目はなかった。探索的因子分析において, スクリーンプロットから 3 因子が妥当と判断した。9 項目 (4, 9, 10, 13) については, 因子負荷量 0.40 以上が 2 因子にわたっているが, いずれも因子負荷量は高い値であり, 項目の内容を削除しないほうが信頼係数は高い値であることから, 本研究では削除項目とせず, 【相手を尊重する表現】【相手に対する姿勢】【相手に対する態度】の 3 因子として因子得点及び合計得点を算出した。

【相手を尊重する表現】は「話の最後の部分を繰り返すことによって, 次の言葉につなげる」「代名詞を使わず, 固有名詞を使い, その言葉を話題として取り上げる」などであり, 相手が表現された言葉を大切にしながら, 同時に自分が発する表現を慎重に選ぶ内容となっている。【相手に対する姿勢】は「言葉や単語の解説に執着することはしない」「情緒面を最大限受け止め, 深い共感をもって理解する姿勢を保つ」などであり, 相手と向き合う心と捉えられた。【相手に対する態度】は, 「相手の目の高さより少し低めに自分の目を合わせ, ひざや手に軽く触れる」「一つの内容には一つの質問をする」等であり, 相手の反応を見ながら自分が表現する具体的な対応であった。

高齢者との交流が人間関係力を高めると思うかの問いに, 72 名 (60%) がとてもそう思うと回答した。交流が自分たちの人間関係力を強く高めると回答した者は, それ以外の者より対人援助力の因子得点が高値を示した ($t(116) = 3.41, p = .001, ES:d = 0.64, t(116) = 4.29, p < .001, ES:d = 0.80, t(116) = 2.74, p = .007, ES:d = 0.51$)。

表 7 対人援助のコミュニケーション力の因子分析

項 目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
相手を尊重する表現 α 係数=0.76			
話の最後の部分を繰り返すことによって, 次の言葉につなげる	0.676	0.176	0.228
意味不明瞭な言葉をそのままの言葉で復唱する	0.652	0.146	0.247
共感的に言葉を補って繰り返す	0.626	0.282	0.325
代名詞を使わず, 固有名詞を使い, その言葉を話題として取り上げる	0.595	0.424	0.495
相手の動作をモデリングして, 言葉のきっかけを促す	0.576	0.21	0.295
方言・文化を尊重する	0.421	0.373	0.271
相手に対する姿勢 α 係数=0.73			
言葉や単語の解説に執着することはしない	0.149	0.754	0.329
情緒面を最大限受け止め, 深い共感をもって理解する姿勢を保つ	0.366	0.721	0.203
いいかげんな気持ちでは聴かない	0.275	0.678	0.417
非言語的表現を重視し, メッセージに強弱をつけて理解する	0.539	0.61	0.238
言葉の意味をあまり追究しすぎない	0.066	0.376	0.195
相手に対する態度 α 係数=0.68			
相手の目の高さより少し低めに自分の目を合わせ, ひざや手に軽く触れる	0.296	0.214	0.692
一つの内容には一つの質問をする	0.396	0.458	0.584
まず開かれた質問をして, 返答がなかったら閉じられた質問をする	0.43	0.3	0.457
低めの声で穏やかに, ゆっくり話, 短い文章をはっきり発音する	0.207	0.368	0.456
相手の名前をフルネームで呼ぶ	0.323	0.2	0.352
因子抽出法: 主因子法 プロマックス回転	因子間相関		
	第 1 因子	0.424	0.443
	第 2 因子		0.444
	第 3 因子		

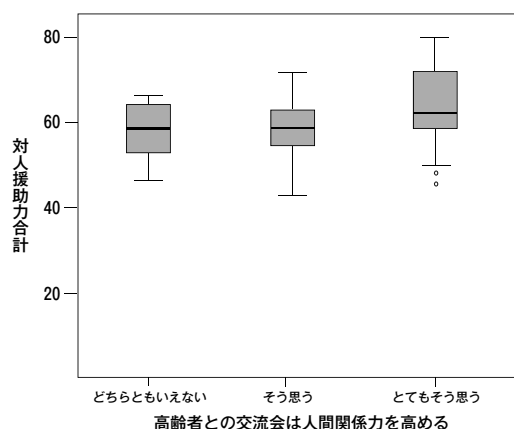


図3 学生の交流会に対する認識と対人関係総合力向上への認識

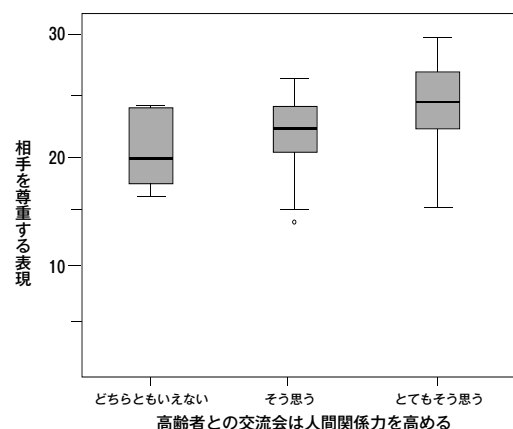


図4 学生の交流会に対する認識と尊重した表現力向上への認識

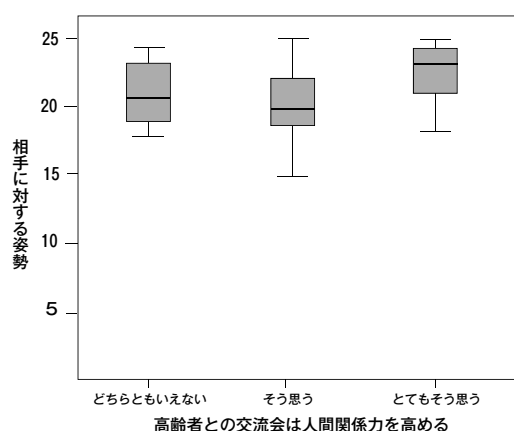


図5 学生の交流会に対する認識と相手に対する姿勢向上への認識

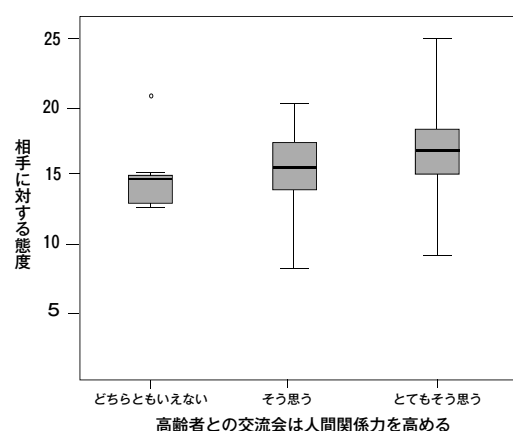


図6 学生の交流会に対する認識と相手に対する態度向上への認識

表8 世代間交流が学生の人間関係を向上という意識と対人援助力

		n	平均値	± 標準誤差	t 値	Cohen's d
相手を尊重する表現	とてもそう思う	72	23.6	± 0.5	3.41 **	0.64
	そう思う以下	48	21.3	± 0.5		
相手に対する姿勢	とてもそう思う	72	22.5	± 0.3	4.29 ***	0.80
	そう思う以下	48	20.6	± 0.3		
相手に対する態度	とてもそう思う	72	17.0	± 0.4	2.74 **	0.51
	そう思う以下	48	15.4	± 0.5		
対人能力合計	とてもそう思う	72	63.2	± 0.9	4.45 ***	0.83
	そう思う以下	48	57.3	± 0.9		

*** p<.001 ** p<.01

7. 学生の交流後のレポート概要

学生は地区の生活課題を医療とスーパーへのアクセスの不便さ、車がないことに対する不便さ、若者世代が少なく地域の催し物をするための若者人材への希求、坂が多く歩く運動の困難さ、災害時の孤立化への不安などを、高齢者との対話から認識していた（学生の事後の振り返りの記述から転記）。また、高齢者との交流について、コミュニケーションが取れないと感じたこと、自然に会話できるようになったこと、バイタルサイン測定や、対話の中から、交流前の学修生活では想像できなかった事象に対する驚きと、困難感、一方では喜びや楽しさ、新たな発見などを記載していた。

■ IV. 考察

学生は、山間地域の高齢者との交流をたいへん有意義で、総合的評価も非常に高い体験学習であったと感じていた。このことは社会福祉協議会担当者と、130名を超える学生を受け入れてくださった地域高齢者の世代性によるものと推察する。自己を活かしたい、地域の活性化に役立てたい、地域の次世代への貢献、社会福祉協議会の方とのつながり等、参加してくださったお一人おひとりの参加理由は様々であろうが、次の世代への関心なくしては、実現しなかった授業であった。学生は、このような高齢者に内在するニーズとそれぞれの高齢者が世代を超えて培ってきた風土の中で、上下や利害関係の感じない無条件で学生を受け入れてくれる年長者と交流できた。また生活者であり、自分を評価する人（教職員）とのかかわりではなく、世代性や祖父母の超越性^{21)~25)}を持つ高齢者とのかかわりを自由に取り、地域高齢者から多くのことを学び、受け継ぐことができた交流であった。

1. 看護学生の世代性とその発達

本調査の結果において、世代性関心は【後継性】【世話性】【発意性】【創志性】の4因子で構成していた。【後継性】の項目は、本来、自己が経験してきた英知を次世代の他者へ伝えるという意味である。しかしこのような中年期以降の世代性（次世代へ自己の経験を伝える）と異なり、本研究でみられた【後継性】には、上の世代の者が経験したことを受け止め、受け継ぐという側面が存在すると考える。これは高齢世代の世代性に呼応する、若者の世代性の様相であると推察する。

【発意性】は丸島らの尺度では創造性の因子項目である²⁰⁾。本研究で異なる結果となったことは、若者世代の特徴によるものと考えられる。社会的スキルの「積極的接近スキル」は看護学生の学年が上がるに従い高くなる²⁷⁾²⁸⁾ことや、大学生の対人関係に対する消極性²⁸⁾が報告されている。一方で、若者世代は青年後期以降に比べコミュニケーション力を高めたいと希望している者の割合は多く、人間関係を円滑に保ちながら伝え合う工夫をしている割合も増加しているとの報告もある¹⁰⁾。また、人間関係を円滑にすることを優先させるために、自分の気持ちや考えを伝えることを避ける傾向があることも指摘されている¹¹⁾。このことから、発意性は世代性を受け取るために、より多く、深く他者とかかわり、他者を理解しようとする意識であり、その後の行動へとつながる要素となる因子であると捉えることができる。

また、【世話性】は「困っている人を見るとつい手助けしたくなる」「相手の話に耳を傾ける」などであった。先行研究の27-84歳を対象とした丸島の世代性研究では同様の世話性の因子が抽出されている²⁰⁾。また看護学生を対象としたエゴグラムではNP（養育的な親の自我状態）・FC（自由な子供の自我状態）が高いという報告もある²⁶⁾。自我状態とは自分の中にある物事の捉え方の違いを意味する。本研究の対象はもともと看護という人と関わり、人への支援について学ぶことを選好している若者である。養育的な一面は、対人の学問以外を選好する若者より高いことが想像でき、本研究において、世話性の因子が抽出することは想像に難くない。このことから、今回の対象である看護学生は、人への直接的関心や対人の関係性によってコミュニケーションを調整する力（透過性調整力）について関心が高く、半面ではその難しさも感じていると考える。看護学生の世話性は、透過性調整力を高めようとする意識により高まっているのではないだろうか。その結果として対人を気にかけて、理解しようとする。気に掛ける内容や質の差こそあれ、その意識は成人期以降の意識と変わらないのかもしれない。

【創志性】は「問題を解いたり、物を作ったりしているときが楽しい」「自分のすることはたいへん新しく創造的である」の項目であり、丸島らの結果²⁰⁾と類似していた。しかし、本研究の対象は看護を学ぶ学生であり、若者世代に特徴的な世代性であることを想像する。自己が想像し、そのことを自己で創り上げることが可能な、成長を遂げた中年期以降の世代性とは違い、看護学生のこの因子は、これから創り上げることのできる自己に成長発達していく世代としての因子であると考えられる。そのため、既存の多世代を対象とした報告とは違う、青年前期の世代性の一部として抽出されたものと考えられる。

看護学生の世代性関心である4因子の全ての因子において、交流前よりも交流後のほうが高値を示し、総合得点においても有意差を認めた。このことは、実質2時間の高齢者との交流ではあったが、地域の皆様が、各地区の特徴を生かし、山間部の暮らしと歴史を伝え、地域のつながりの中でできる関わりを

実施して下さったこと、あるいは学生が個人とグループの課題を事前に確認し合い、それぞれが目的をもって地域を訪問したことが学生にとって意義ある交流につながったと考える。さらにほとんどの学生が自分と同世代のバイタルサイン測定の経験しかない2年次前期に、仲間以外のバイタルサインの測定をさせていただくことは、フィールドワークに対する充実感につながる自己成長を感じられる機会であったと考える。

また、前述したように、学生は積極的に新たに出会う他者と深く関わることを苦手とする場合もある。また、人間関係を円滑にする工夫はできるが、知りたいこと聞きたいことを他者に伝えることに消極的であったりする。短時間であったからこそ濃厚な関りが持てた可能性がある。特に、交流前後で有意差を認めた【後継性】と【創志性】は、世代を受け継ぐ若者世代には、新しいことを修得し、若者世代なりの生活観、人間観を構築することにつながると考えられる。本研究では【発意性】が交流前後でほとんど変化しなかった。このことは、異世代との交流であることや、同世代以外の人への初めてのバイタルサイン測定など、自信の持てない言動を伴うことが影響していたと考える。その理由は、自分たちの生活圏に来てもらうのではなく、初めての場所、初めて出会う他者とその生活圏に、自分が入り込むことの緊張感であり、練習してきたはずのバイタルサイン測定では想像外の出来事と出会う経験をする。また質問する内容を考えてきたはずが、実際に対話すると自分たちからは思った以上に話しかけられない、思ったほどコミュニケーションがうまくいかないなど、関心は高まったけれど、一方で自信をもって事象に向き合いきれない自己の課題も感じ、そのことが積極的に人と関わる意識を阻害しているのではないかと考える。

2. 対人援助力への影響

看護学生の世代性関心と対人援助力は相関関係にあることが明らかとなった。同世代であっても、異世代であっても世代性の関心は、対人援助のはじまりであろう。そのはじまりから、より世代性を発達させていくためのかわりが生まれてくる。そうした関りに対する学生の充実感は、どのように基礎的コミュニケーションを中心とした対人援助力と関連しているのであろうか。

今回の世代間交流が若者世代にとって、あるいは高齢者世代にとって非常に有意義であると感じた学生は、【世話性】が高値であった。また、生活課題をとて理解できたと答えた学生は、【世話性】【創志性】が高かった。これらの結果から、高齢者との交流によって、知識としての理解ではなく、高齢者に対話し、共同することによって、感覚として人間の生活や、地域の生活課題、高齢者とその生活そのものの存在を理解することができたのではないかと考える。学生は地区の生活課題を医療とスーパーへのアクセスの不便さ、車がないことに対する不便さ、若者世代が少なく地域の催し物をするための若者人材への希求、坂が多く歩く運動の困難さ、災害時の孤立化への不安などを、高齢者との対話から認識していた。学生はこれらのことを共感による理解ではなく、学生が想像できない、また利便性の良い市街地にはない生活環境に触れた実感から生じた理解と考える。そして、それはバイタルサインを測定させていただき、健康課題は何かを考えるというフィールドワークに合目的に参画することで得られた理解であったと考える。

今回、高齢者との交流が人間関係力を高めると思うと全員が回答し、とても思うと回答した学生は72名(60%)であった。また【尊重する表現】【相手に対する姿勢】【相手に対する態度】の対人援助力3因子及び総合得点は、とてもそう思うと回答した学生が有意に高値であった。また前述のように、高齢者とのかわりや世代性を発達させており、世代性関心は対人援助力と有意で正の相関関係にある。これらのことは、高齢者との交流が看護学生の対人援助力を成長・発達させ、学生の将来の看護、あるいは看護の役割を認識させることにつながったのではないかと考える。

コミュニケーションが難しかったか否かの違いでは世代性関心の得点に有意な差は認めなかった。加藤らは、コミュニケーションを難しいと感じている学生では患者尊重スキル以外の社会的スキルは高く、コミュニケーションがうまく取れていると感じている学生は表出行動スキルと積極的接近スキル以外の社会的スキルが低かったと述べている²⁷⁾。本研究においてもコミュニケーションが難しかったと感じたか否かでは、世代性関心に有意な差は認めず、加藤の結果と同様にコミュニケーションが困難だという

感覚には個体差があり、困難感と学生の成長とは一致しない可能性があると考えられる。高齢者と交流し、会話することを学生が難しかったと捉えることと、実際の世代性関心の発達に関連がなく高齢者との交流前後で学生の世代性関心の得点が高くなることから、学生個々のコミュニケーションに対する認識に寄らず、高齢者との交流が学生の世代性を発達させることが可能であるといえる。

3. 学生の世代性及び対人援助力を高める高齢者との交流

今回、短時間ではあったが、高齢者と関わることでできた看護学生は、世代性関心と対人援助力を発達・成長させていると感じていた。工藤らは、看護職を目指す看護学生は初歩的なコミュニケーションスキルが低値を示すことから、あいさつやスモールトーク、自己紹介、グループ演習などのトレーニングを、高度の・ストレス処理の・計画のスキルより優先的に育成する必要がある³⁰⁾と述べている。また、加藤らは、実践体験を豊かにし、学生が省みる機会を増やすことなどのコミュニケーション教育²⁷⁾が重要と指摘している。さらに、橋本らは、日ごろから自己を見つめ直すことを意識し、計画的にその場を作る²³⁾ことが必要であると述べている。

以上のことから、高齢者との交流をより効果的に企画するためには、基礎的スキルをトレーニングしたのちに交流を計画すること、また交流までに学生自身が自己の生活を見つめ直す機会を設けること、そして交流後には、交流時の振り返りから学びを深められる仕掛けが必要である。例えば、学生が訪問した同じ地域への主体的に再訪問する機会の提供、あるいは近い間隔で、違う地域特性をもつ地域へ訪問するなど、学生が課題とする内容を再体験できる機会を提供するなど、学生の学びを強化する工夫が必要と考える。

4. 本研究の限界と課題

本研究では、世代性関心尺度の探索的因子分析によって得られた下位因子の信頼性係数は十分でなく、分析の過程で複数の項目を削除したことから尺度の妥当性も十分ではない。このことは、丸島らの尺度は目的が成人期以降を対象にしているのに比べ、本研究では若者世代の世代性を対象としている。対象を異にすることから、質問項目が若者世代には想像しにくい内容であった可能性がある。同様に本研究で使用した対人援助尺度においても、妥当性が十分ではない。これらの点については、今後、尺度の精度を高め、検証していくことが課題である。また、本研究で得られた結果が、実施した高齢者との交流だけの成果であるとも言いきれない。さらに交流の対象地域や、文化的背景による違いなど、本研究における課題は多い。しかし、本研究では、若者世代の世代性が受け継ぐものとしての意識と、将来、創造性が発揮できる自己になるための若者世代の世代性を構成する因子を検討することへの示唆が得られた。また、世代性と対人援助力には関連が見られ、今後は、どのような交流がどのような世代性や対人援助力を成長・発達させるのか、詳細に検討し、教育に反映させていきたい。

■ V. 結論

山間地域在住の高齢者との交流における看護学生の世代性関心の変化とコミュニケーションを中心とした学生の対人援助力について検討した。若者世代の世代性関心は【後継性】【世話性】【発意性】【創志性】の4因子で構成されていた。学生は高齢者とのかかわりの中で、すでに創造できる力を獲得した中年期以降の世代性と違い、これから創造力を獲得する後継者としての世代性因子を成長・発達させていた。一方、様々な人や物へ関心は示すが、経験不足から自信がもてないために成長・発達を阻害する因子の存在も推察できた。

■ おわりに

本研究は、地域在住の皆様の世代性を発揮していただいたからこそその貴重な異世代交流であった。看護学生は、その思いを受け止め、自己の世代性を成長・発達させていることが示唆された。今後、看護

の世界で自己研鑽を積み、相手の立場に立った看護の提供を考えると、それぞれが各地区の高齢者から受け継いだものを、生活者の視点で課題解決していけるよう、看護学生たちのこれからの世代性の成長と発達に期待したい。本研究の結果は、分析の過程で、信頼性等が十分とはいえない点もあるが、今後は学生に内在する能力を引き出すために教育的な仕掛けと、看護を目指す学生が将来の自分を描き、そのために日々看護のスキルを磨けるような異世代交流を実施していくことを課題として、世代を超えたより意義のある交流のために検討を重ねていきたい。

謝辞：

今回の交流実現のために、受け入れてくださった地域の皆様、そして、学生を地域のフィールドに送り出すために、多忙の中、地域の皆様との調整をしてくださった社会福祉協議会の皆様、さらに、異世代交流の授業に主体的に参画された学生の皆様、本研究は非常に多くの関係者の方々にご協力いただきました。ここに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 草野篤子：世代間交流学の樹立に向けてのプレリユード 現状と今後の課題，老年社会科学，33(3)，461-471，2011.
- 2) 村山 陽：地域における世代間交流の可能性と課題，老年社会科学，39(2)，174-175，2017.
- 3) 亀井智子，糸井和佳，梶井文子ほか：都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証－Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて－，老年看護学，14(1)，16-24，2010.
- 4) 大場宏美：世代間交流型介入研究－REPRINTS プロジェクトの10年のあゆみ，応用老年学，7(1)，15-23，2013.
- 5) 村山 陽，高橋知也，村山幸子ほか：高齢者における「世代間の触れ合いに伴う感情尺度」作成の試－高齢者の心身の健康との関連－，厚生指標，61(13)，1-7，2014.
- 6) 吉村遼子：大人への移行における他世代交流の意義～当別町における社会福祉法人ゆうゆうの事例を参考に～，社会教育研究，34，63-73，2012.
- 7) 糸井和佳，亀井智子，田高悦子ほか：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果－文献レビュー－，日本地域看護学会誌，15(1)，33-44，2012.
- 8) 伊丹君和，鈴木恵夢，高見紀江ほか：『未来看護塾』の活動および「人と関わる体験」が看護学生へもたらす効果，人間看護学研究，6，49-61，2008.
- 9) 和田希美，西村昌記：世代間交流が高齢者のジェネラティビティと精神的健康に与える影響，東北大学健康科学部紀要，23，45-55，2017.
- 10) 文化省，わかり合うための言語コミュニケーションについて，http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401904.html，（検索日：2018年09月19日）
- 11) 赤澤慶美：SNS と若者のコミュニケーション能力の関係，<http://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2016/14/a1170387.pdf>，（検索日：2018年09月28日）
- 12) 木村晶子：現代の若者たちの人間関係，人間生活学研究，23，1-11，2016.
- 13) 上野栄一：看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度の開発，ヘルスカウンセリング学会年報，20，59-69，2014.
- 14) 比嘉勇人，山田恵子，田中いずみ：看護学生を対象とした援助的コミュニケーションスキル測定尺度 β (TCSS- β) の開発及び信頼性と妥当性の検討，富山大学看護学会誌，14(1)，31-39，2014.
- 15) 橋本美香，長谷川真紀：コミュニケーション力育成に関する調査，川崎医学会誌一般教，41，2015.
- 16) 廣瀬春次，大田友子，井上真奈美ほか：看護学生のコミュニケーション行動に関する研究，山口県立大学学術情報，4，47-53，2011.
- 17) 吉岡由喜子，山本純子，三井京香他：看護系大学3年次生の高齢者に対するコミュニケーション力

- についての一考察, 太成学院大学紀要, 15, 149-155, 2013.
- 18) 長澤ゆかり, 安川揚子, 中村摩紀ほか: 老年看護学におけるコミュニケーション演習の効果ー通所高齢者とのコミュニケーションに焦点を当ててー, 茨城県立医療大学紀要, 23, 33-39, 2018.
 - 19) 石橋昭子: 精神看護学実習前後における看護系大学生のレジリエンスとストレス状況対処行動の変化, 日本精神科看護学術集会, 58(3), 244-248, 2015.
 - 20) 丸島令子, 有光興記: 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討, 心理学研究, 78(3), 303-309, 2007.
 - 21) 富澤公子: 奄美群島超高齢者の「老年的超越 (Gerotranscendence)」形成に関する検討ー, 高齢期のライフサイクル第8段階と第9段階の比較ー, 立命館産業社会論集, 46(1), 87-103, 2010.
 - 22) 富澤公子: ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2), 111-119, 2009.
 - 23) 深瀬裕子, 岡本裕子: 老年期の心理社会的課題に関する研究の動向と展望, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 58, 209-123, 2009.
 - 24) 増井幸恵: 老年医学の展望 老年的超越, 日本老年医学会雑誌, 53(3), 210-214, 2016.
 - 25) エリク・H・エリクソン, ジョーン・M・エリクソン著, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳: ライフサイクル, その完結【増補版】, みすず書房, 151-190, 2001.
 - 26) 橋本茂子, 上田雪子, 木部 泉: 青年期初期から看護を志向する看護学生の対人関係の形成と自我状態の透過性調整力との関連, 千葉看護学会誌, 22(1), 43-51, 2016.
 - 27) 加藤 栞, 沢佳夏子, 下瀬寛子ほか: 看護学生の社会的スキルと共感性の学年比較に関する検討, 米子医学雑誌, 64(3), 78-86, 2013.
 - 28) 大坊郁夫: 社会的スキルの階層的概念, 対人社会心理学研究, 8, 1-6, 2008.
 - 29) 中村 晃: 大学生の性格における年代的变化 (西昭夫先生退職記念号), 千葉商大紀要, 41(3), 1-19, 2003.
 - 30) 工藤千賀子, 原田真里子, 櫛引美代子: G 大学看護学部における社会的スキルの実態, 北日本看護学会誌, 10(1), 45-51, 2007.

参考文献

- 1) 斎藤孝子, 中原るり子, 櫻井美奈ほか: 基礎看護学実習 I にむけたリフレクションツールを活用したコミュニケーション演習の効果, 共立女子大学看護学雑誌, 3, 49-61, 2016.
- 2) 中村恵子, 柄澤清美, 中村圭子: 看護学生の初年次教育におけるロールプレイングを用いた話の聴き方指導の成果と課題, 新潟青陵学会誌, 7(3), 13-24, 2016.